

資料紹介

宮城県図書館蔵「会津全図」について

はじめに

本稿の目的は、宮城県図書館の所蔵する「会津全圖 附切絵圖七枚」(以下「会津全図」という一群の絵図の史料紹介と、その作成の背景について考察することにある。後に詳しく述べるが、一群の絵図は、すでに竹内英典氏によって、その基本的な内容は紹介されている「竹内二〇〇七」)。また絵図の一部は、一九九八年に開催された福島県立博物館企画展「戦国の城―天守閣への道―」や、最近では仙台市博物館企画展「戦国の伊達氏―植宗から政宗へ―」などの展覧会においても公開されたことがある。

本稿は、近年の北塩原村教育委員会による閲覧調査を経て、二〇一九年六月一日に開催された福島県史学会で行った口頭報告を基にして執筆したものである。以下、本文の1および3は布尾が、それ以外の部分は高橋が担当して執筆した。

1 絵図の概要

「會津全圖 附切繪圖七枚」と上書きされた紙袋に入れられているのは、「米澤 會津 仙道方角之圖」「米澤領 館山 成嶋圖」「若松領耶摩郡檜原村圖」「若松領耶摩郡大塩村圖」「若松領 猪苗代・金川村・三橋村・日橋・摺上原・磐梯山圖」「安達郡塩松圖」の六枚(口絵1〜6)であり、「会津全図」というタイトルの絵図はないが、本稿では、所蔵者の所蔵名で呼称することとする。紙袋とそれぞれの絵図に、製作年代は記されていない。

竹内英典氏は、「製作者、製作意図、製作年代ともに不明である」としながらも、「各切絵図には伊達氏と関係深い旧跡が描かれており」「仙台藩関係者が、伊達家の事蹟跡を描き留めるために製作されたもの」とする。しかし一方では、「伊達家の陣には『貞山様御陣所』、会津家の陣には『義廣陣』と記されている」が、「『政宗館』と敬称を使用しない記述もあり、俄かには確

定し難い」とも述べている「竹内二〇〇七」。

1 a 各絵図の基礎情報

各絵図のサイズは以下の通りである(単位はすべてセンチメートル)。「米澤 會津 仙道方角之圖」が二〇九・一×二一〇、「米澤領 館山 成嶋圖」が三十四×四十六、「若松領耶摩郡檜原村圖」が六十六・五×四十五、「若松領耶摩郡大塩村圖」が六十一・三×九十五・五、「若松領 猪苗代・金川村・三橋村・日橋・摺上原・磐梯山圖」が一二四・二×一三二、「安達郡塩松圖」が一一七×八十六である。いずれも手彩色である。

次に、それぞれに何が描かれているかをみていく。絵図に共通した描き方として、道は朱線、川は青で示され、東西南北が記入される。

「米澤 會津 仙道方角之圖」(口絵1 以下、絵図①と呼称する)は、絵図名は南東隅に北を上にして書かれる。描かれた範囲が最も広く、その対象は現在の宮城県南部の白石市から福島県南部の白河市を結ぶ中通り地方を中心に、福島県桑折町から山形県米沢市周辺を経て新潟県との県境までと、会津全域から栃木県・新潟県との県境までの、三県にまたがる広範囲である。絵図の外側にあたる空白部分には「相馬」「仙臺御領伊貢郡内」「最上郡上ノ山へ出ル道」といった土地情報が記載される。領国境については「阿妻山」の部分に稜線の一部が太い線を重ねて描かれ、南西に「会津領」、西に「米澤領」、東に「信夫」と書かれている。他に会津と米沢の間の山中では葉の部分に赤い木を列状に描き国境を表しているようだが、これ以外の領国境は描かれない。

文字情報としては、圧倒的に集落名が多い。道に数珠繋ぎにされる形で、四角で囲まれた奥州街道沿いの集落と、円で囲まれたそれ以外の道に位置する集落がある。「青田原」「摺上原」「八森」のように四角や円で囲まれていな

\* 高橋 充  
\*\* 布尾 幸 恵

\* 福島県立博物館 \*\* 北塩原村教育委員会

い地名もある。さらに二本松や白河等には「城」と記す場所があり、これ以外に「西山古館」「塩松古館」等の、「古館」と記載される箇所があることから、当時機能していた城としていない城が区別されている。

この絵図①には付箋が五枚貼られ、同一の紙袋に入っていた絵図に対応しているものがある。付箋「檜原村別紙二絵圖云々」は「若松領耶摩郡檜原村圖」に、付箋「大塩村別紙二絵圖云々」は「若松領耶摩郡大塩村圖」に、付箋「金川三橋 猪苗代別紙二絵圖云々」は「若松領 猪苗代・金川村・三橋村・日橋・摺上原・磐梯山圖」に、付箋「塩松絵圖別紙二云々」は「安達郡塩松圖」に対応する。付箋「會津中将御廟繪圖別紙二云々」のみ、対応する絵図がない。付箋が確認できない絵図が「米澤領 館山 成嶋圖」で、これについては付箋が剥がれた可能性も考えられる。

「米澤領 館山 成嶋圖」(口絵2 以下、絵図②と呼称する)は、現在の山形県米沢市の西部に位置する館山地区を描く。絵図範囲は館山地区を中心にした半径三キロメートル程度である。絵図名は南東隅に西を上にして書かれる。絵図のほぼ中央に川を描き、その川に架かる二か所の橋の南西の山上に「館山」「古御城」があり、東へ延びる道は「米沢城下ノ方」につながる。この道の北側に高まりが描かれ、「田澤古館」と注記される。橋から北東へ延びる道は「成嶋町」を通り、その西側に「成嶋 鶏沢山八幡宮」「成嶋山」「龍宝寺」を描く。この寺社の門前の木々は縦に長い円錐形と横に広がる半円形の樹形をもつものに描き分けられる。

この絵図に描かれた場所は、現在でも比定できるものがある。絵図の中央の川は大樽川と鬼面川である。「館山」「古御城」は、国指定史跡館山城跡「米沢市教委二〇一五」である。ここは伊達氏が築造し、上杉氏の時代に廃城となったとされる山城跡で、山上の榊形虎口には上杉氏の築造とみられる石垣が遺存している。この館山城跡の麓には、発掘調査の結果、十六世紀(十七世紀初頭の館跡があったことがわかっているが、それは記入されていない。鶏沢山八幡宮は、現在も米沢市成島に所在する成島八幡宮である。いっぽう「田澤古館」は現在、その所在は不明である。「延宝五年所々廻見覚書」(第二章参照)に、この古館は「是二新田氏罷有候由申伝候」(10、以下、番号は第二章に対応している)、つまり新田氏がいたという言い伝えがあったという。新田氏というのは、「性山公治家記録」の、元龜元年(一五七〇)に起こった中野宗時・牧野久伸の謀反の記事にみえる、伊達氏の有力家臣であり、館山城主と記載される新田四郎義直のことであろうと思われる。現在、館山地区と米沢の間に位置する矢来地区には館山平城が比定されているが

「山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館二〇一二」、「館山城跡」「米沢市教委二〇一五」では、新田氏段階の「館山平城の状況は不明」とする。絵図作成段階では、館山平城を「田澤古館」だと考えたのかもしれない。

「若松領耶摩郡檜原村圖」(口絵3 以下、絵図③と呼称する)が描くのは、現在の福島県耶麻郡北塩原村檜原地区で、中心部に描かれた「ぼどう山」から半径三キロメートル程の範囲である。絵図名は北西隅に南を上にして記載され、絵図名の付箋もある。米沢街道が図のほぼ中央を通る。その道と交差して川が描かれ、道の途中に「屋根にケバがつかない家」が集まる「檜原町」がある。その北東の山上には「政宗館」が描かれ、南麓には「馬場跡」がある。宿場の周辺に「糠塚」「がうの原」「ぼどう山」という地名が書かれる。絵図の南には二つのピークをもつ「磐梯山」がある。「檜原町」の西の山上には「殿山」がある。

この絵図でも、現在その場所の多くを比定できる。「檜原町」は明治二十一年(一八八八)の磐梯山噴火により水没し現在は見ることができない、旧米沢街道の檜原宿であろう。「政宗館」は、天正十三年(一五八五)年に伊達政宗が檜原に侵攻した際に築城した(「政宗記」「伊達天正日記」、檜原(小谷山)城跡である。「糠塚」は、檜原城跡の南側、檜原湖にある糠塚島と呼ばれる小島である。「ぼどう山」の位置にある丘陵は現在、堂場山と呼ばれており、「ぼどう山」という注記は聞き間違いか書き間違いであろう。ここに「會津陣所」と記入があることから、岩山城跡と思われる。この山城は、文化六年(一八〇九)成立の地誌「新編會津風土記」と、軍記物「檜原軍物語」に登場(「巖山移城事」)する。「檜原軍物語」の成立は、「原本巻二ノ末尾二」天正十七年ヨリ享保八卯年迄凡百三十年ニナル」ト記入セル、享保八年ハ本書々寫ノ年ト覚ユ」という書き込みがあるため、享保八年(一七二三)以前の成立とされる。「檜原町」の西方にある「殿山」は戸山と呼ばれ、その場所には戸山城跡が所在する。「がうの原」は湖底となり、わからない。「馬場跡」の場所も不明である。「延宝五年所々廻見覚書」(第二章参照)では「御館之下二小川も流申候、川と御館山之間二馬場御座候而、御逗留之内毎日御馬御責被成候由、所之者申伝候」(13)とし、後に書かれた文献史料では寛政元年(一七八九)に會津藩士高嶺覺大夫慶忠により成立した編纂物「會津鑑」や、片倉家で貞享年間(一六八四〜一六八八)から編纂が始められた「片倉代々記」等で、伊達政宗が檜原を略取したのち馬場で馬をせめる場面を挿入することから、そうした逸話との関連がうかがわれる。絵図には「馬場跡」の南側に薄い緑で細い楕円を描くが、現在檜原城跡麓の南側平坦面には湖底

へと続く土塁があり、これに比定できる可能性がある。

「若松領耶麻郡大塩村圖」（口絵4 以下、絵図④と呼称する）は、現在の福島県耶麻郡北塩原村大塩地区を中心とした、およそ二キロメートル四方を描く。絵図名は北西隅に東を上にして記載され、付箋もある。

朱書された道は大塩を通る米沢街道で、これは北東から山中を蛇行し、途中で西方向に分岐して小さい建物と点線でつながる。さらに本道の橋の北東側に、短い柵で四角く囲まれた建物がある。本道が橋を渡り道が折れ曲がる場所にはコの字状に配置された屋敷の中央に高札場がある。川を渡った先の道の両側には、「屋根にケバがつかない家」が連続して描かれる。

道と川の間には、桁で高架にされた樋と柵が、道から一段下がり、三方を石積みで囲まれた「潮」と記載された場所から連なり、青で塗られていることから水を流していたことがわかる。その両側に、「屋根にケバがつく家」が、樋と柵がある川沿いから階段で上がった所に連なって描かれる。道沿いにも二軒ほど「屋根にケバがつく家」があるが、道沿いと川沿いでは家はおおむね描き分けられている。絵図の南東には頂上が平らになった山が描かれ、「古館山」と記載される。

絵図内の記載について、現在の視点から確認すると、「橋の北側にある短い柵で四角に囲まれた建物」は文化六年（一八〇九）成立の「新編会津風土記」挿図から、現在は山の上に移転した「温泉神」と考えられる。「潮」と描かれた場所は温泉の自噴井の「塩井」で、現在は、国道四五九号線の拡幅工事で移転し近くに模型が残されているが、従来は国道四五九号線から松原へ向かう道の大塩川べりにあったという「富岡一九七六」。この「潮」から続く樋と柵沿いに集中して描かれる「屋根にケバがつく家」は、その書かれた場所の違いからも、製塩の家々であろう。「延宝五年所々廻見覚書」（第二章参照）にも「塩を煮申候家廿六軒御座候」（20）とあり、かなりの人々が製塩に従事していたことがわかる。「古館山」は柏木城跡で、近世の軍記物や地誌類にも多く登場する中世の山城跡である。発掘調査の結果、蘆名氏が天正年間に、伊達政宗の会津侵攻に対抗するために築城した城であると判明しつつある。「北塩原村教委二〇一五」。

「若松領 猪苗代・金川村・三橋村・日橋・摺上原・磐梯山圖」（口絵5 以下、絵図⑤と呼称する）は、福島県会津地方にそびえる磐梯山の南麓、現在の猪苗代町・磐梯町・喜多方市（旧塩川町の一部）付近という、東西三十キロメートルを超える広範囲を描く。絵図名は絵図の南西隅に北を上にして書かれる。

磐梯山とそれに連なる山々を絵図の北側に、「湖水」と記載された猪苗代湖を南側に描き、その間に「屋根にケバがつかない家」で表現された「猪苗代町」がある。猪苗代町の西には「城山」があり、これは位置的に猪苗代城である。「猪苗代町」より北側には「磐梯大明神」「中将君御廟」がある。

絵図の東側に「本宮道」「土湯越福嶋道」と注記がある道が二本通り、それらは猪苗代町の西で磐梯山側と猪苗代湖側に分かれる。猪苗代湖側の道は田畑の間を抜け「三町湯」を通り、「戸ノ口橋」を渡って盆地におりる。磐梯山側の道は、「八森 貞山様御陣所」「片倉小十郎陣所」を北に見ながら「摺上」を通り、「義廣陣所」と「金上陣所 墓」の間を通過して「大寺」で再び分岐、一つは「日橋」を渡って「若松城下ノ方」に向かう。若松から大寺・猪苗代を経て本宮へ向かうルートは二本松街道で、戸ノ口から三町湯を経て猪苗代へ向かうルートは二本松裏街道「福島県教委一九八三」である。「大寺」から分岐するもう一つの道は「佐瀬大和墓」の横を通り「新橋」を渡って「駒形山 貞山様御陣所」「物見峠 片倉小十郎陣所」を北に、「金川橋」を渡り「金川」「三橋」に出る。

猪苗代湖と、吾妻山麓から発して南流する長瀬川が合流する「小平湯」には、「天神」がある。猪苗代湖から西へ流れ出す川は日橋川である。その日橋川に「駒形山」付近で合流するのは大谷川である。大谷川の支流は「観音嵩」奥から発する前川と思われる。橋には「戸ノ口橋」と「日橋」という橋名が記載される。また、「三橋」「金川」には「古館」がある。

他に、現在も比定できる場所としては、「磐梯大明神」「中将君御廟」が、それぞれ磐梯神社と土津神社となる。「天神」は、小平湯天神である。「三橋」の「古館」は三橋館跡、「金川」の「古館」は金川東条館跡か、それに近接する金川石川館跡「塩川町二〇一〇」のいずれかであろう。「駒形山 貞山様御陣所」は、「塩川町史 第三卷」では「駒形山館跡」に比定されている。「塩川町二〇一〇」。「猪苗代町」に近い「八森 貞山公御陣所」「片倉小十郎陣所」は、現在、その場所はよくわからず、道との関係からすると猪苗代町大字不動あたりの、磐梯山南西麓の尾根に比定されているのかもしれない。「義廣陣所」は「会津四家合考」（寛文十三年成立）「会津旧事雑考」（同十二年成立）の記述と同じく高森山に比定されている。

「安達郡塩松圖」（口絵6 以下、絵図⑥と呼称する）は阿武隈川より東側の、福島県二本松市と本宮市を中心に描く。東西二十キロメートル、南北十キロメートルくらいの範囲であるから、絵図①・⑤に次いで、描かれた範囲が広い。絵図名は絵図北西の余白に、東を上にして書かれる。

絵図の西を「大隈川」、現在の阿武隈川が流れる。広範囲を描く絵図ではあるが朱書された道の表記は絵図①・⑤より少なく、「二本松渡」から絵図中央の「小浜町」へ向かう実線と、「小浜町」の町はずれから「宮森古館」の横を通って「権現谷土」へ向かう点線、「権現谷土」から「弘中渡」へ向かう実線のみである。山間に点々と書かれた、「円で囲まれた「平岩」「南白岩」等の集落では、それら集落ごとに「屋根にケバがつかない家」が二〜三軒程度描かれ、さらに田畑が描かれる。「小浜町」には「屋根にケバがつかない家」が道沿いに並び、町の南東には「昔ノ町場」という注記もある。

またこの絵図は、「古館」「古城」の注記が最も多い。絵図に描かれた「岩角古城」「塩松古城」「糠沢古館」「月館古館」「小手森古館」「新城古館」「宮森古館」はいずれも、「政宗記」「貞山公治家記録」に登場する城・館である。「政宗記」「貞山公治家記録」で「築館」「槻館」と記載される場所も、前後の記述から「月館古館」のことであろう。「古館」と「古城」の違いは絵図からは不明である。これらの城は、「小手森」の「古館」は小手森城跡、「小浜町」の「塩松古城」は小浜城跡、「宮森古館」は宮森城跡など、現在も遺跡として確認できる場所も多い。「岩角」には特徴的な形の岩山が描かれるが、これも現在本宮市に確認できる。また絵図の北と南の余白に「伊達方」「三春方」という記載がある。

この絵図では全体の描き方が特徴的で、この絵図のみ、現在の地名と照らし合わせると方角や距離感がかなりゆがんでいる。「大隈川」は「川前大平」のすぐ北で小河川と合流しているように描かれるが、実際の阿武隈川は大平地区の北で大きく東へ蛇行しており、小浜のほうから北流する小河川（移川）と合流するのはさらに東へ行ってからのこととなる。現在みられるこの蛇行は地形的にも近世と大きな変化はないものと考えられるため、作図上の都合の可能性がある。

## 1 b 絵図の絵画的表現

次に、各絵図における対象の描かれ方などの絵画的表現について検討する（第1図）。

絵画的表現としてまず目につくのが、人物が描かれないことである。絵図の大半は山や川などの自然、道、建物などである。

そしてこの自然の表現として多く見られるのが山野に生えている樹木で、その描き方を比較すると、大きく2種類ある。「幹の部分スタンプで押し、葉の部分のみ筆を使うもの」と、「幹と葉ともに筆を使うもの」がある（第

1図―図1）。幹の部分スタンプで押し、葉の部分のみ筆を使うものは全部の絵図にみられる。一方、幹と葉ともに筆を使う表現については、絵図②の成嶋社の門前にある円錐形の樹形をもつ針葉樹らしい木と、半円形の樹形をもつ広葉樹らしい木、絵図⑤の「天神」にある「梅」「松」の記載が付く場合や、絵図①にある、会津と米沢の領国境に見られるひととき大きな木など、特別な場所や特徴的な樹木に関して使われるようである。

絵図①・③・⑤の磐梯山は、標高が高い大磐梯山と低い小磐梯山が描かれる。さらに絵図①・⑤には現在も南側から確認できる山腹の特徴的な谷地形を描く（第1図―図2）。いっぽう猪苗代湖は絵図により若干形が変わり、絵図①は方形に近く絵図⑤が若干細長い。湖から流れ出る日橋川は絵図①・⑤に共通するが、湖にそそぐ長瀬川があるのは絵図⑤のみである。しかし湖にかぶ「福浦嶋」や湖の南方にある屏風岩（現在の郡山市湖南町）と思われる突き出た岬状の表現などは非常に似通っている（第1図―図3）。

川の表現は、宮城県と福島県境の阿武隈川が狭い谷間を流れている様子や、日橋川が現在の磐梯町周辺で深い谷底を流れる様子、白石から米沢へ向かう「戸沢」〜「渡瀬」間にある、現在の宮城県七ヶ宿町の柱状節理の岸壁の様子（第1図―図4）など、写実的な描き方がされている場所がある一方、奥会津の「伊北」「伊南」は川を表す青い線が空間に描かれるのみである。

次に、各絵図に共通する人工物として道や家屋・寺社等が挙げられる。朱書された道は殆ど実線だが、絵図①の猿倉峠の近くと、絵図④の山の中の道、絵図⑥の宮森古館と権現谷土の間に点線がある（第1図―図5）。絵図⑥の点線は実線を同じ向きに配するが、絵図①と絵図④は実線に直交する点線が描かれ、あるいは階段状の施設を示した可能性も考えられる。

家屋（第1図―図6）は屋根が薄赤、壁は白で着色され、「屋根にケバがつかない家」と、柱や筋交いが描かれ壁の表現がない「屋根にケバがつかない家」と、「屋根にケバがつかない家」のみ描かれる絵図②・③・⑤・⑥と、「屋根にケバがつかない家」と「屋根にケバがつく家」のどちらも描かれる絵図④にわけられる。町があるのに家が描かれないのは絵図①である。この絵図群においては、「屋根にケバがつかない家」は街道沿いや集落名と共に多くの絵図に描かれることから通常の居住用の家屋、「屋根にケバがつく家」は絵図④では、製塩をするための作業家屋という、そういった描き分けがなされた可能性があるのではないだろうか。

寺社（第1図―図7）は、絵図②の「鷄沢山八幡宮」にみられる山門とやや反り返った軒先をもつ屋根や、「龍宝寺」のように、根太があるように描か

れる建物、絵図④の、鳥居を伴う柵に囲まれた建物、絵図⑥の「八幡宮」に描かれた、柱が長い建物など、通常の家屋とは構造が異なることが見て取れる。複数の絵図に描かれている「中将君御廟」（絵図①・⑤）は、絵図①では建物を一つ描きただけだが、絵図⑤では建物とその前に伸びる道、その道の両側にまた建物を描く。

城館跡（第1図―図8）は絵図①の「西山古館」のように山の上を実線で囲って注記されるもの、「須加川」の横の古館のようにケバを描いてその上を緑色で塗るもの、絵図②の「田澤古館」のように円形の実線の周りにケバを伴うもの、絵図①の「阿子ヶ島」のように円形のケバのみのもの、絵図①の米沢から会津へ向かう街道沿いにある、風景を描いてある上から白く塗って「古館」と注記したものがある。

耕作地（第1図―図9）は、絵図⑤・⑥に描かれる。どちらの絵図も並行する二本の線で畔を描き、その間に「II」を描く。

その他に、絵図④の高札場（第1図―図10）や榎・榭（第1図―図11）、絵図①・②・⑤の橋（第1図―図12）がある。絵図②の橋は細長い長方形を四角に組んだ中に3つの長方形を同じ方向に配した形で、他絵図では長方形のみで描かれることが多い。

以上、絵画的表現についてみてきた。「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）と併せて見るとより明瞭となるが、絵図①の川や、絵図①・⑤の磐梯山など、実見したものについては詳細に描かれていると考える。実見していない奥会津がほぼ空白なのはそのためであろう。これは、絵図の方角の歪みにも表れている可能性があり、例えば絵図④の「三橋」「金川」は西に延びた日橋川沿いに位置が正しく描かれているが、絵図に描きこむ目的物のない、その南にある会津盆地は空白のままとなっている。同じように絵図⑥の範囲を描けば「奥大平」と「内小和田」「外小和田」の間は大きな空白となるだろう。

「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）を見る限り、小浜の記述は詳細であるが小手森など周辺の記述は簡潔で、こういった記述が簡潔な場所は、実際には現地に行っていない可能性もある。このような、実見しているか否かの差が絵図の歪みに影響を及ぼしている可能性も残るが、絵図⑥に見られる歪みは、後述するような、クローズアップしたい出来事があり、それを中央に描きたいがために周辺が歪んだ可能性もある。

## 1c 絵図の注記と内容

次に、絵図に記入された文字情報を通して、絵図の記載内容やその作成意図について検討する（第2図）。

文字情報は、白石や二本松といった「地名」と、天神や塩松古城といった「施設名」のほか、絵図⑤・⑥に顕著である「八森 貞山様御陣所」「片倉小十郎陣所」や「礫ノ所」といった「出来事」を記したものがみられる。

絵図の中で、円や四角で囲まれた地名は、絵図が書かれた当時に存在していた集落である。絵図①では街道別に円と四角の使い分けがあったが、絵図⑤では同じ道でつながる「摺上」は円で囲まれるが「大寺」は四角で囲まれている。絵図⑤における四角と丸の使い分けは、街道の宿場・宿駅か、通常の集落か、という可能性があるが、絵図①での街道ごとの四角と丸の使い分けについてはその指標は不明である。これらの集落の間の距離や、既に存在していたはずの一里塚は記載されない。

前項で見たように、各絵図には「古館」「古城」が描かれる。これらを見ていくと、絵図①の「西山古館」は伊達家の先祖である伊達植宗・晴宗が居住した西山城跡である。絵図②の館山城跡、絵図③の松原（小谷山）城跡、絵図⑥の小浜城跡・小手森城跡・宮森城跡も伊達氏関連の城跡で、「岩角古城」は天正十三年十一月に本宮周辺で行われた合戦で登場する（「政宗記」）。注記のないケバのみの城館跡でも、絵図①の、本宮から会津へ向かう街道と並行する五百川沿いと、「高倉」の上に描かれた円形のケバは、近くに「人取橋」「青田原」といった注記があることから、この合戦において各勢力が陣を置いたとされる場所と考えられる。それぞれの絵図の範囲には記載されない城館跡も存在しており、絵図①を例とすれば「福嶋」には伊達晴宗が隠居した福島城跡、「大森」には伊達氏が仙道攻略の際に拠点としていた大森城跡のほか、かつて本拠があった梁川があるはずだが、これは記載されない。そして絵図③で米沢から会津へ向かう街道沿いにある、「殿山」と注記される戸山城跡は、「延宝五年所々廻見覚書」（第2章）では伊達政宗築城と把握されている。この山城は、元和八年（一六二二）に書かれた「元和八年仙道会津老入覚書別本」「北塩原村教委二〇一五」にも登場する「村の成宛（戌亥の誤りか）の方」にある城と考えられ、松原に居住していた蘆名方の穴沢氏の城とされている。同時代の文書はもとより「貞山公治家記録」「政宗記」等にも政宗が戸山城に入った、ということを書いたものはないが、松原（小谷山）城を築城・運用を始めるまでのごく短期間、蘆名方の山城を改修して伊達軍が使用した可能性も考えられる。このように、選択の基準は不明ながら、描かれる城の多くは伊達政宗が何らかの形で関与した、と絵図作成時点で把握

された城館跡であると言えよう。これは寺社の記載にも見え、**絵図②**「鶏沢山八幡宮」には、伊達宗遠の永徳三年（一三八三）の拝殿造立棟札を始め、伊達政宗・成宗・尚宗・晴宗・輝宗・政宗の棟札が残る。「米沢市上杉博物館二〇一六」。龍宝寺は伊達氏とともに岩出山を経て仙台に移り、大崎八幡宮の別当になっている「竹内二〇〇七」。

**絵図⑤**には、「貞山様御陣所」すなわち伊達政宗や片倉小十郎の陣所のほか、敵方であった蘆名氏の「義廣陣所」のほか、「摺上合戦」当時は蘆名氏の旗下であった金上氏や佐瀬氏の墓についても記入している。この**絵図⑤**に特徴的なのは、伊達政宗のことを「貞山様」と諡名で記載し、「陣所」に「御」を付すことで、これは冒頭で紹介した竹内氏の見解に繋がるものである。対照的に蘆名義広のことは「義廣」と実名書きにする。蘆名氏と伊達氏に対する表記の違いは**絵図③**にも見られ、蘆名氏がいたとされる場所は「会津陣所」とのみ記す。この**絵図③**の「政宗館」という呼称について、竹内氏は「貞山様」と書かれていないことに疑問を呈しているが、「延宝五年所々廻見覚書」（第2章）には「爾今政宗館と申候」（13）とあり、現地で聞いた名称をそのまま記したものであろう。

**絵図①・⑤**に描かれる「中将君御廟」については、「中将君」とは会津藩主の保科正之のことで、左近衛中将であったことに由来する。「御廟」は現在の土津神社でその祭神は保科正之である。伊達氏とも伊達綱村自身とも血縁や姻戚関係などはないが、伊達重村の命を受け明和九年（一七七二）に成立した「封内風土記」の叙では、「会津故羽林中郎將源公、撰会津風土記、其於治国可謂勤矣、」と書くなど、正之が幕閣にいたこともあつてか、その影響が見て取れる。また、保科正之の死後に描かれたこの**絵図**が、「土津」ではなく「中将君」と記載することについては、「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）で「中将正之君」（33）と呼称していること、さらに「家世實紀」でも、保科正之の死後何年かは人々が「中将君」と呼んでいることが確認できるため（「家世實紀」延宝二年一月十三日条、延宝四年九月十六日条、延宝五年四月五日条等）、本**絵図**群の年代や、会津での現地取材を示す傍証になる。

表記された地名の中には、複数の地名が存在した場所もある。**絵図⑤**の「権現谷土」（**絵図①**では権現谷戸）がそれで、「会津四家合考」には、「早宮森より東路十里余打ち過ぎて、平石村の辺、高田といふ所にぞ着きぬ、（中略）義継も之を最期と思ひ定めけるに、阿武隈川弘中の瀬より、七八町隔てたる権現谷地といふ小高き所へ、輝宗を引上げ、」黒川編一九一五」とある。こ

れにより、**絵図⑥**の点線は輝宗が拉致されたルートを示していることもわかる。いっぽうで、序文に「元禄十一年正月」（一六九八）とある戸部一愍正直著の「奥羽永慶軍記」には「阿武隈川ノコナタナル高田ニテソ追付ケル」「近藤編一九〇四」とあり、「高田」という地名のみが採用されている。この高田または高田原という地名は「貞山公治家記録」「政宗記」でも確認できる。「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）でも「此辺を高田之原と申候て、少広キ所ニ御座候、又候権現谷土共あはのすとも申候、」（50）とあり、既に地名が複数あったことがわかる。この複数の地名については「福島県の地名」「平凡社一九九三」の「粟ノ須古戰場跡」の項でも既に指摘されているが、権現谷土と記すのは管見の限り「延宝五年所々廻見覚書」と「会津四家合考」だけであり、「高田」ではない地名を**絵図**に採用したことは、「会津四家合考」を参照して、よりピンポイントで輝宗が殺害されたと伝わる場所を示す地名を選択した可能性もある。これは**絵図⑤**にも言えることで、伊達家の同時代史料である「伊達天正日記」や、伊達成実が記した「政宗記」には見えない「義廣陣所」が高森山に比定されることは、「会津旧事雑考」「会津四家合考」の記述を参考にすることも考えられる。

政宗の事績という観点で**絵図**群を再度確認すると、**絵図②**は伊達政宗が永禄十年（一五六七）八月三日に生まれた地・米沢（「貞山公治家記録」）周辺を描く。米沢城跡でなく館山城跡が描かれるのは、「貞山様迄御住居被遊候山城」（10）という認識のためであろう。なお、元文元年（一七三六）成立の、米沢における最初の地誌として挙げられる「米沢事跡考」には「館山城」が「伊達大膳大夫政宗長井を掌握して此地に城を築く」とあり、九代儀山政宗が築いたというように成立が非常に古く設定されている。一方、天明二年（一七八二）に成立した、仙台藩士である佐藤東蔵信直が執筆した「仙台武鑑」には、「永禄十年八月三日。羽州置賜郡米澤二生レ給フ。置賜郡米澤城ハ。今上杉家ノ米澤城ヨリ三十餘丁ヲ経テ西ニ当ル土俗館山ト呼フ其所ナリ。」として、政宗が生まれた「米沢」は今の上杉氏が作った城のある所ではなく「館山」のことだ、と述べる。この「仙台武鑑」の認識は、「延宝五年所々廻見覚書」（第2章）の（10）と類似したものではないだろうか。これを「館山城跡」「米沢市教委二〇一五」では、「米沢の地誌類には見られない記事であり」「近世の仙台藩における米沢時代の伊達氏居城の位置づけに關する認識の一つ」とする。いっぽう、「貞山公治家記録」では「出羽国置賜郡長井莊米澤城ニ於テ誕生」とするのみで、米澤城が館山のこと、とは書かない。

絵図③は天正十二年（一五八四）に家督を継いだ政宗が翌十三年に攻め取った会津の松原を描く。

その経緯については「政宗記」「元和八年仙道会津老人覚書別本」に詳しい。すなわち、天正十三年（一五八五）五月二日、伊達家家臣の原田宗時が北方（現喜多方市）へ、三日に政宗が松原へ侵攻した。この時、原田宗時が侵攻したときに使用した「猿倉峠」は、「延宝五年所々廻見覚書」（第2章）によれば「米沢御城々南築沢と申所へ登り申候而、會津領入田付と申所へ罷下、関村へ出申候、」（21）というルートで、絵図①に描かれる。この、原田宗時の侵攻は様々な要因でうまくゆかず、彼は米沢に引き返した。一方、政宗は「即時に檜原は手に入」（「政宗記」）れた。政宗は、原田宗時の成功をもって二方向から黒川方面へ侵攻するはずが、原田が敗北したという報を聞き「五月五日に惣軍を檜原へ参れと触給ひ、諸勢参るを待給へば、其間に会津の人数は大塩へ桶籠り、城は堅固に相抱へけり。」（「政宗記」）ということになった。ここに現れる「城」は絵図④の「古館山」、つまり柏木城であろう。こののち政宗は八日に「大塩の上の山まで働きけれども、山中にて道一筋なれば備を立つべき地形なし。大山隔て後陣は檜原を引離れざれば、合戦には及ばず」（「政宗記」）として、大塩での合戦をせずに檜原に引き上げた。政宗はこののち五十七日間にわたって松原に在陣するが、その場所が絵図③の「政宗館」、松原（小谷山）城である。政宗が米沢へ帰還する際には、松原城代として後藤信康が置かれた。

絵図④は大塩での塩泉水を使った大規模な製塩の様子が描かれている。現在のところ、同時代文書のほか「貞山公治家記録」等、後世の編纂物にもこの製塩に政宗が関わったという記録はなく、政宗の事績という点からは異質である。絵図④に関しては、覚書作成の取材時に偶然目にした山中での大規模製塩という珍しい光景を書き残したのものかもしれない。

絵図⑤は天正十七年（一五八九）のいわゆる「摺上合戦」を描く。「政宗記」「伊達天正日記」によると、六月一日には大森城（現福島市）から伊達の鉄砲隊が土湯峠（絵図⑤「土湯越福嶋道」）を越えた。六月四日、仙道から猪苗代に入っていた片倉景綱と伊達成実が摺上（現磐梯町）を見廻り、「新橋」が落とされているのを確認した（「政宗記」）。いっぽう政宗は、「七時分」（午後四時、「伊達天正日記」）に安子嶋を出立し深夜零時ころに石筵峠を通り、猪苗代に入った。六月五日、政宗ら伊達方は、蘆名義広が猪苗代にきた、という情報を受けて摺上に向かい、合戦となっている。この合戦で、金上・佐瀬を始めとして蘆名方は「馬上三百余騎、野臥共二千余討取、」（中島伊勢

守宛書状、伊達家文書、『仙台市史資料編10』45「仙台市一九九四」）られて伊達方の勝利となった。六月六日、政宗は絵図⑤にもある金川・三橋（現喜多方市）まで軍を進め、大寺（現磐梯町、絵図⑤の「大寺」）に戻った一方、米沢・松原を経由してきた原田宗時は、この日に大塩にさしかかったが、「大塩あけかたに引申候」（「伊達天正日記」）、「あまつさへ大塩の城は引除」（「政宗記」）となっており、柏木城は既に誰もいなかった。六月七日、政宗は大寺を出て三橋に入ったのち、黒川の近くまで「村押」を行った。政宗が黒川（会津若松）に入ったのは六月十一日である。この「摺上合戦」のくだりについては、「会津四家合考」「会津旧事雑考」では政宗が「八ガ森」に陣し、義広が「高森山」に陣するとあり、絵図⑤がそれらの記述によって記載されたとみられるのは前述したとおりである。

絵図⑥は天正十三年十月八日の輝宗拉致事件を描いている。十月八日、畠山義継が小浜の宮森城にいた輝宗に直面し、その後、輝宗を拉致して西へ逃走した。絵図⑥の点線がこの輝宗の拉致ルートであることは前述した。高田原で輝宗ともども義継が撃たれたとする結末と、政宗が撃てない間に義継が輝宗を刺し殺して自害したとする結末など、この事件は、後世、様々な軍記物・編纂物に描かれた。そして「礫ノ所」は、死亡した義継の遺骸を礫にしたとされる場所である。

広範囲である絵図①には、以上の絵図②～⑥に描かれたこと以外にも政宗に関連する事柄が描かれているのは前述の通りで、天正十三年十一月に起こった青田原・人取橋周辺を含む合戦の舞台も描かれている。

以上のように、この絵図群に関しては、伊達政宗に関連した場所を描くことが目的であることがわかってきた。すると、タイトルを「米澤 會津 仙道方角之圖」とする絵図①は、政宗生誕の地・米沢を含め、「摺上合戦」で蘆名氏に勝利し政宗が手にした蘆名氏領の範囲が描かれているとみるべきで、政宗が手にした最大版図のうち、米沢・仙道・会津方面を描いていると考える。この絵図①と類似の範囲を描いた図は「仙道之図」など他にもある（「仙台市博」二〇一七）。「十七～十八世紀」に制作されたとされる「仙道之図」には「政宗公御取相伊達成実之述」との注記があり、解説では「伊達成実が作った絵図をもとに作成」「仙道を中心に、伊達氏の居城がある米沢や長井郡（山形県）会津地方なども描かれ」「若き日の政宗が合戦にのぞんだ古戦場」も描かれる。

「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）に絵図①の範囲を描く理由が書かれていないこともあり推測でしかないが、付箋の存在から、絵図①は、他絵

図の位置を示す見取り図的な絵図として作成されたと考えられる。

## 2 「延宝五年所々廻見覚書」と絵図との照合

これらの絵図の作成と密接に関連すると思われる史料が、仙台市博物館の収蔵資料の中にある。同館の伊達家寄贈文化財（古文書）の中の「延宝五年所々廻見覚書」（1018号、以下「覚書」という）一冊で、表紙及び奥書より延宝五年（一六七七）四月二十一日に落合勘左衛門（慊春）と窪田権九郎が作成したものであることがわかる。

この史料は、管見の限りでは『下館町郷土史』に一部紹介されたことはあるが（「茨城県の地名」「中館村」、本論に関わる重要な史料なので、仙台市博物館マイクロフィルムからの翻刻によって、以下に全文を掲げる。

「延宝五年所々廻見覚書」 仙台市博物館蔵

（伊達家寄贈文化財・古文書1018）

※一つ書きの番号は翻刻者が記入

※本文の改行位置に「」を記入

（表紙）

「延宝五年

所々廻見覚書

窪田権九郎

落合勘左衛門

此度諸所廻見仕候覚

1 一 荊田郡湯原町西之末二、鹿音山東光寺」御座候、只今ハ曹洞宗住持仕候、

御位牌

捐館東光寺殿儀山圓孝大居士神祇

但紙二書、御佛壇之込板二張置申候

2 一 湯原町ハ一里西二右東光寺之旧地御座候、一 爾今東光寺山・同屋敷・同  
隠居屋敷と」申伝候所御座候、此地ニ而 御墳墓を」奉尋候へ共、分明  
二 知不申候、此寺炎上已後、一 只今之地へ移住仕、数年退転之跡ニ而」  
御座候故、什物旧記等も無御座候由申候

3 一 東光寺古屋敷跡ハ七八町西二屋代と」申山御座候、 政宗様御陣所之由  
申伝、一 爾今御要害之跡分明ニ相見申候、只今此」屋代山ハ米沢領分ニ

御座候、屋代山之下ニ米沢」領新宿と御領内湯原之境目路合と申」所御  
座候、但絵図仕指上申候

4 一 米沢ハ三里半北夏荊村ニ慈雲山資福寺」之屋敷跡 性山様御墳墓御石塔  
并」遠藤山城石塔も御座候、古ハ 御霊屋御」座候由申伝候、寺之跡ハ  
畠ニ仕、当村之肝煎」百姓徳左衛門と申者屋敷ニ仕罷有候、惣構之」土  
手堀、爾今御座候、委曲絵図ニ仕指上申候

5 一 資福寺屋敷跡ハ四五町東北ニ館屋敷」跡畠ニ罷成候而御座候、古之住人  
名氏知不申候而」長井殿館と申伝候

6 一 資福寺屋敷跡ハ川を隔申候而、十町計」西北ニ栖島と申村御座候、古此  
所ニハ湯目」半内住居之由申伝候、当所ニハ幡宮御座候、一 是又右半内  
造建之由申伝候

7 一 米沢ハ出羽国置賜郡上長井之内ニ御座候、一 但荊田郡湯原御境目路合ハ  
行程六里」餘御座候、板屋通江戸道八町目迄十五里御座候、一 米沢領内  
置賜郡を四つ二分申候而、上長井」郷、下長井郷、北条郷、屋代郷と申  
候、此知行」本高十八万石内屋代郷三万石ハ福島領」御蔵入ニ而、当時  
米沢領分ニ御座候、残三ヶ郷之」高拾五万石米沢領ニ御座候

8 一 米沢只今之城ハ直江山城始而築申候由、平城ニ御座候

9 一 米沢城東之本町ニ古伊達郡西山ハ御移」被成候三十三体之観音像御座候  
処ニ、寛永」十七年米沢大火事之時炎上仕候由、只今ハ」其後ニ観音一  
体造立仕置申候、別当を」観音寺と申伝、山伏住持仕候、此外仙臺」輪  
王寺昌伝庵之遺跡御座候

10 一 米沢今之城ハ川を隔三十町計西ニ館山と」申候而、 貞山様迄御住居被  
遊候山城之御旧」跡御座候、御城下ニ町々之名も爾今申伝候」地形共御  
座候、此御古城ハ川を隔東之方」田沢と申所ニ館屋敷跡御座候、是ニ新  
田氏」罷有候由申伝候

11 一 館山ハ川を隔二十町許東北之山ニ八幡宮并」社僧龍寶寺其外六供坊等町  
屋も御座候、一 此所を成嶋と申候、八幡宮山号を鶏沢山と」申候由

12 一 館山ハ東南、遠山と申所ニ慈悲寺之跡御座候、一 近年尼寺を立申候由、  
右之所之絵図指上申候

13 一 会津領内北方耶麻郡檜原町ハ廿町」許東之山ニ天正十三年夏、一 貞山様  
米沢ハ御出馬、檜原通御攻取被成候」時、会津へ之御向城跡御座候、此  
所を爾今」政宗館と申候、南向ニ而前をがうの原と申候、一 只今ハ林ニ  
罷成候、御館之下ニ小川も流申候、川と」御館山之間ニ馬場御座候而、  
御逗留之内毎日」御馬御責被成候由、所之者申伝候



- 14 一御館山へ向申候而十町計南にばどう山と申候て、会津」方之出城ニ罷成由申伝候山御座候
- 15 一磐梯山も御館山ハ四里計南ニ相見申候
- 16 一御館山ハ山繞五里許東ニ阿妻嵩と申」大山御座候、七阿妻と申候而、峯七つ御座候、内」信夫領・米沢領・会津領三ヶ所へ分レ」申候由
- 17 一右御館山之扉ニ枚檜原之町ニ爾今御座候、一枚ハ檜原(本氏穴沢)新八と申候者、当地関所之番頭」仕候者所持仕候、此新八先祖ハ穴沢新右衛門と申候而」貞山様へ返忠之御奉公仕候由、所之者申伝候、一枚ハ檜原町穴沢新右衛門と申町人所持仕候、」此者之先祖ハ穴沢善四郎と申候而、黒川方ニ而」罷有候由申伝候、但御門扉檜ニ而高五尺・幅三尺宛之跡御座候、」此所水不自由ニ御座候故、右之御館山へ御移」被為成候由申伝候、右之通絵図ニ仕指上申候
- 18 一檜原町ハ七八町西ニ殿山と申候而、」貞山様最初ニ御取立被成候御向城之跡御座候、」此所水不自由ニ御座候故、右之御館山へ御移」被為成候由申伝候、右之通絵図ニ仕指上申候
- 19 一米沢ハ檜原へ行程八里之間、大難所ニ御座候、」取分米沢領綱木ハ檜原へ四里檜原」峠と申候而、高山御座候、十月ハ四月迄雪深」御座候而馬蹄之通無御座候
- 20 一檜原ハ會津通之山中駄家大塩と申所ニ」潮之温泉涌出仕候、此潮を寛ニ而取伝」申候而、塩を煮申候家廿六軒御座候、大塩町」屋之西路辺ニ城山之跡御座候、此城ニハ古」三瓶大蔵と申者罷有候由申伝候、右之」絵図指上申候
- 21 一會津北方耶麻郡大塩と熊倉之間、駄路ニて」一里余北ニ関と申所御座候、爰ニ古へ彈正と申者」罷有候而、内助ニ御戦被成候二付、天正十三年會津」へ御手切之初、原田左馬助米沢ハ猿倉峠を」越申候而、右之関村へ參、彈正と一味同心仕、在家ヲ」焼立申由、御軍記ニも相見申通ニ御座候、猿倉」越ハ米沢御城ハ南築沢と申所ハ登リ申候而、」會津領入田付と申所へ罷下、関村へ出申候、」是又猶以大難所ニ御座候、関村近所ニ関柴、」同村漆村と申村御座候
- 22 一若松(旧名黒川)會津郡之内ニ御座候、領内ハ會津郡、」大沼郡、川沼郡、耶麻郡、安積郡之内少、下野」国塩谷郡之内少、越後国蒲原郡之内少、以上高」式拾三万石、此外ニ預分御座候由、但江戸道」白川迄六里半餘、米沢ハ若松迄行程十五里半
- 23 一城ハ一里程西南ニ向羽黒(一名岩崎)と申山御座候、」此所ハ古へ葦名盛氏隠居所と申伝候
- 24 一城西堀之内ニ瑞雲山高(興)徳寺と申臨濟宗」勅額之寺御座候、貞山
- 25 一若松ハ放火不被成候由所ニ申伝候  
(興)徳寺ハ放火不被成候由所ニ申伝候
- 26 一金川ハ東十四五町川上ニ而北之岸ニ」貞山様御陣方ニ被遊候山御座候、是ニ紅ノ丸之」御旗を御揚、御馬を御立被成候二付、爾今駒形山と」申候由、且又駒形山之後ニ丸山御座候、是ニ片倉」小十郎鐘之旗を立、物見を置申候所ニ御座候故、爾今物見」山と申候由、在々所々ニ申伝候
- 27 一若松ハ猪苗代通巷里余東北ニ而大寺と申候」駄家之少前ニ橋御座候、是を日橋と申候、」此川も猪苗代湖水之落候ニ而、右金川橋」之上ニ御座候、貞山様猪苗代ハ御出馬」摺上原ニ而義廣御合戦之時、黒川方之惣人数」日橋を打越、摺上へ出向、大寺邊迄群集仕候処ニ」日橋ハ會津之方ニ扣罷有候者共味方之旗」色散々ニ罷成候を見申候而、敵を會津へ」入不申候様ニと日橋ニ薪を積、焼落申折節」義廣敗北ニ付、味方之軍勢日橋を渡リ」黒川へ逃入可申と川岸迄崩落申候、又日橋ヲ」焼落申候間、川を渡可申と数千入飛入申候所、」瀧之ことく成大河ニ御座候へハ、一人も不殘溺死申候」由申伝候、此時義廣ハ只一騎ニ成、川下へ落行、」金川之橋ハ黒川之城へ引退、其後常州」龍ヶ崎へ逃亡之由ニ御座候
- 28 一慶安年中大旱之年、猪苗代之湖水乾」申候付、日橋川も流断申候、具足甲刀脇指」鎗長刀之朽申□夥敷川底ハ取上申候て、」若松之城へ上申候由、其外人馬之白骨も多、川」底ニ相見申候由所之者物語仕候
- 29 一橋近所大寺之町西裏ニ芦名之一家金上」遠江守盛備古墳御座候、是ハ西入倉と申村」之近所ニ會津四天と申習候者之内佐瀬大和」古墳も御座候、何も摺上ハ落足ニ被討申候由申」伝候
- 30 一摺上原磐梯山之麓ニ八森と申山ニ」貞山様紅キ丸之御旗、其下糠塚と申二片倉」小十郎鐘之旗御座候由、所之者申伝候、此辺ニハ」古塚多相見申候
- 31 一湖水之岸小平瀉と申所ニ、天神之社御座候、此社ハ」連歌宗匠猪苗代兼栽母始而□□之申由申伝候、則兼栽松、兼栽梅と申両木御座候
- 32 一湖水之内船ニ而漁人之自由仕候、殊ニ三町瀉と」申所ハ坪落(下)と申所迄荷物等之運送仕来」御座候、右絵図指上申候
- 33 一猪苗代町ハ七八町西磐梯山之麓ニ會津」右中将正之君之御廟堂御座候

- 34 一右同所北之方ニ磐椅大明神之社御座候  
右之絵図指上申候
- 35 一猪苗代町裏ニ古へ彈正盛国居城御座候、「貞山様仙道分此地へ御出馬、則盛国居城ニ」御宿陣被遊、盛国ニ御先手被仰付、磐梯山」之麓摺上原ニ而御合戦被為成候由、所之者も申」伝候、只今彼城ニ八日向半之丞と申者、會津分」城代ニ罷有候、但盛国嫡子盛胤義ハ一乱」以後、上方ニ流浪仕候而、至而愚暗之者ニ御座候故」渡世不被成候而、猪苗代へ取歸候を、所之者扶助仕」指置申候を、加藤左馬助殿會津へ御移被成候」已後、筋目を御聞及、試ニ右盛胤を被召出候処ニ」□□成□□申候ニ付、被召仕候義も無御座候、猪苗代」領内之百姓共介抱ニ而宇津野村と申所ニ加藤」式部少輔殿以後迄も罷有病死仕候を、百姓共」葬申候而、爾今宇津野村ニ墓石を立置申候、「此節盛胤を□分と申候由、物語承候
- 36 一猪苗代分仙道通四里東北安積郡中山と申」馭家御座候、天正之比及此所ニ而中山大蔵居」住之由申伝候、但佐瀬源兵衛(旧名河内)と申剛者を」此大蔵手自生捕候由申伝候
- 37 一右中山分二里東之馭家横川町北後之」山ニ古城之跡御座候、此所古之城主相尋申候へハ、高玉之抱城之由申候
- 38 一横川分一里路北東山中ニ高玉之古城」御座候、貞山様仙道御攻戦之節、高玉」内膳と申候者、二本松義継一家着城仕候処ニ」御家人牛越忠兵衛、右内膳を討取申候由申伝候
- 39 一横川分六七町南阿子嶋と申所ニ古城之跡」御座候、古へ此城主ハ會津旗下伊藤右衛門罷」在候、但右衛門ハ田村月斎族之由申伝候
- 40 一横川分一里東北之馭家苗代田と申所ニも」古城之跡御座候、此所ハ伊達安房抱城之由
- 41 一苗代田分一里許東南五百川之南岸ニ前田沢」と申所御座候、此所ニ會津旗下伊藤兵部罷」有候由
- 42 一苗代田分東青田原之南ニ荒井村同所ニ橋も御座候、「御軍記ニ出申所ニ御座候故書越申候、古へ此所ニハ荒井重道と申者居住仕候由
- 43 一苗代田と本宮之間を青田原と申候、御軍記ニハ」太田ノ原と御座候ハ誤と相見申候
- 44 一青田原之内本宮分廿町許西南二人取橋」御座候、古へハ深き用水堀ニ御座候由、只今ハ少々」堀ニ而土橋御座候、爾今猪苗代分本宮へ罷出候」往來之橋ニ御座候
- 45 一人取橋と本宮之間、路邊觀音堂之旧地ニ」杉一本御座候、此觀音堂之跡分本宮町南之」入口迄ハ七町許隔申候、今之觀音堂ハ本宮町」南入口分少所ニ御座候、貞山様御野戦之」節觀音堂ニ御休息被遊候由申伝候
- 46 一本宮町北町之西裏山之上ニ古館之跡御座候、此所ニ」二本松之家來氏家新兵衛、遊佐丹後、鹿子田」和泉、此外一人名氏知不申候、已上四人罷有候由、「氏家新兵衛罷有候山ニ古來分社御座候、是を」安達太郎ノ明神と申候
- 47 一本宮北之入口山際ニ富寶山石雲寺と申候」禪寺御座候、此右手ニ、貞山様数度御」旅泊被遊候由申伝候
- 48 一本宮分一里西之山際ニ玉ノ井之城跡御座候、「此所ニハ古へ二本松一家新城彈正罷在候由
- 49 一本松古之城ハ今之城分上之山ニ御座候而、「貞山様之御人数を内助仕引入申候箕輪」玄蕃居所粟柵と申所も山之上ニ御座候由」申候、
- 50 一本松分東塩松へ大隈川を越申候弘中之渡と」申所分十町許東ニ、性山様御生害被」遊候御跡ニ御座候、二本松之者共之死骸を」取集申候て埋置申所と相見、塚之上ニ松」桜を植置申候、是を民間ニ而ハ」輝宗様御墳墓と申習候、此邊を高田之」原と申候て、少廣キ所ニ御座候、又候」權現谷土共あはのすとも申候
- 51 一弘中之渡分二里余東ニ小浜と申候而、古へ大内」備前定綱居所御座候、爾今町屋御座候、是分」一町許南ニ宮森と申所御座候、大内備前を」御退治已後、貞山様ハ小濱ニ御宿陣、「性山様ハ宮森ニ御宿陣被遊候処ニ、二本松」義継宮森へ來訪ニ付、大事出来仕候由、「御軍記之通ニ申伝候、或ハ異説も御座候
- 52 一小濱町分弘中へ之出口ニ義継之死骸を磔」懸被成候跡之由申伝候、松一本御座候
- 53 一小濱分一里半余北ニ築館と申所ニ古城之跡」御座候
- 54 一小濱分三里東北ニ小手森之城跡御座候
- 55 一小濱分十四五町東ニ新城と申所之城跡御座候
- 56 一小濱分一里半西南ニ岩角之古城跡御座候
- 57 一御軍記ニ樵山と申落城之地御座候、是を」塩松領にて相尋申候へ共、一円知不申候
- 58 一御軍記ニ安房殿攻口竹屋など申所ハ小手森分」六七町南ニ御座候、是を所にては竹からやしきと申候
- 59 一小濱分十町許東北ニ會津勢之陣所長岫ト」申所御座候、是を御軍記ニハ長崎と誤申候と相」見申候

- 60 一本宮今一里東塩松領糠沢と申候ハ、安房殿「陣所之由ニ御座候、但古之山城之跡本宮辺今」相見申候
- 61 右塩松領安達郡之内ニ御座候、委絵図仕指上申候
- 62 一安積郡高倉駅家之東裏ニ古城之山御座候、「後ニ大隈川流申候、古へ此所ニハ高倉太郎左衛門」住居之由申伝候、但高倉北之入口五百川流申候而、「大隈川へ落合申候、五百川ハ安達郡と安積郡之」境川ニ御座候
- 63 一高倉今西南ニ会津佐竹今攻落申候由、中村と」申所御座候
- 64 一郡山今三里西北ニ片平と申所御座候
- 65 一郡山東裏ニ古城之跡御座候
- 66 一須賀川之城跡ハ町之西裏ニ御座候、只今之町も」三ノ丸之内ニ御座候由申伝候、但町之東ニ城山相」見へ申候ハ田丸中務取立可申由にて、切開申候へ共」成就不仕候跡之由申候、右何も絵図ニ仕指」上申候
- 67 一常陸国真壁郡伊佐庄中館と申所ニ、昔」宮内太輔行朝様被成御座候ニ付、爾今」行朝館と申伝候由、伊佐庄之者共」案内仕候御旧跡御座候、此御城跡者殊之外」廣岡にて御座候、此御跡畠ニ御座候へ共、惣構・門構」等之土手堀之跡相残置申候
- 68 一此所を、昔ハ中村と申候へ共、十四五町南ニ下館之城」(増山兵部様只今御在城) 一里半北ニハ久下田之上館と申城跡」御座候ニ付、中館と申習候由所之者申候
- 69 一御本丸之内、御前様被成御座候御跡之由小社を」立置申候、神名を内ノ御前と申候
- 70 一御本丸櫓之跡之由、畠ニ仕候へハ、必畠主ニた、り」申候由申習、荒シ申候而指置申所少御座候
- 71 一南之方大手口之由申候、側ニ諏訪・八幡之両社御座候、「行朝様御建立之由申伝候、此両社之後ニ櫓之」大木一本御座候、此神木ニ世々奇恠之説を申候
- 72 一御城跡之東ニ隣り申候而、観音堂并別当天台宗」施無畏山観音寺其外小社等御座候
- 73 一毎年十月法花三昧執行、法花経一部宛」書写仕納申候石筒之由観音堂之良之方ニ」御座候、此石筒之廣塚之内ハ、行朝様御霊」廟之由申候、此後ニ大杉一本御座候、此杉ニも」奇特之義御物語仕候
- 74 一観音寺と下館之間ニ八町と申地之名御座候、「是者昔中館町屋之跡之由申伝候
- 75 一観音寺之東ニ而岡之下ニ流申候を勤行」川と申候、上館・中館・下館共

二東之構川ニ御座候、「観音寺法花三昧之時、此川にて垢離仕候故、「勤行川と申候由

76 一御城跡今七八町西ニ泉と申所御座候、爰ニ」石塔二箇相並申候而御座候、西ノ方ニ立申候ハ」頼朝公御石塔、東之方ニ立申候ハ伊達殿之」御石塔と所之者教申候も、頼朝公と申伝候」石塔も少大きく少高き所ニ御座候、何も」文字ハ無御座候、○又此近所ニも内ノ御前と申候」社御座候

○此所ニ近年近所今小寺被移相立申候、

77 一 下館之城ハ中館以後ニ田村氏之人取立」住居之由申候、此田村氏ハ水谷左京殿」先祖ニ御座候而、伊勢守殿迄十六代之」所領ニ御座候由、右水谷伊勢守殿ハ三十」七八年已前ニ備中松山へ国替、其跡」松平讃岐守様御居城ニ罷成、「讃岐守様四国へ御国替之後数年江戸今」御宿衆被遣、其後増山兵部少輔殿御拝領」爾今住居被成候、右之通委絵図ニ仕指上、「行朝様御事、観音寺今書上申候を」指上申候

78 一 中館今二里半計北ニ中村と申所御座候、「爰をハ、甲斐之中村と申候而、下野国之内ニ」御座候、遍照寺と申候真言宗并釈迦堂」御座候、又八幡宮并に頼朝卿之石塔と」申も御座候、当所にて 御先祖様御事」奉尋候共、申伝候義無御座候、以上

窪田権九郎

延宝五年巳四月廿一日

落合勘左衛門

慊春

この史料は、内容を通覧すると明らかなように、伊達家の先祖の旧跡等を調査した際の記録である。明確に作成目的を記した部分はないが、たとえば蒔田郡湯原町の東光寺周辺を回りながら、「御墳墓を奉尋候へ共、分明ニ知不申候」(2) とあるように、「御墳墓」すなわち伊達家の墳墓を尋ね歩いたが、はっきりわからなかったと書かれていたり、また下野国中村でも「御先祖様御事奉尋候共、申伝候義無御座候」(78) などと書かれている。

延宝年間の伊達家による先祖の旧跡等の調査については、先行研究があり、およそ以下のようなことが明らかにしている。「松浦一九八七、土生一九九四、羽下二〇〇一」。延宝三年(一六七五)十二月、仙台藩四代藩主綱村より、藩士の落合勘左衛門・窪田(久保田)権九郎の兩名が、伊達・米沢等にある先祖の旧跡の探索を命じられた。兩名はまず伊達方面の調査を行い、次いで米沢等の調査を行うが、それぞれ調査結果の報告書を作成した。このう

ち後者の報告書に該当するものが、「延宝五年所々廻見覚書」と位置づけられている。なお羽下氏も指摘しているように、この史料には一部に抹消や書入れがみられる。また、後述するように落合家の系譜類の中には、勘左衛門が懐春を名乗るのが貞享元年頃とするものがある。現存する史料は、正式に藩へ提出されたものではなく、草案もしくは後からの追記・修正の可能性がある。

合計七八の各項目の概要をまとめると別表のようになる。この書き方は落合・窪田両名がたどったルートに沿って、ほぼ記述されていると考えてよいだろう。すなわち仙台藩領の最南端である刈田郡湯原町から米沢領に入り、会津領を経て安達郡・安積郡や岩瀬郡の須賀川、さらに下館藩領の常陸国真壁郡や下野国中村にまで到達したことがわかる。詳しい行程（到着や出発の日次等）は示されていないが、後述するように、延宝五年の二月半ば頃に兩名が会津領にいたことが会津藩側の史料で確認できるので、その後に残りの行程を終えて、同年四月二十一日付けで、この報告書をまとめたものと、ひとまず考えることができる。

この史料の中で、あらためて注目したいのは、文中の所々に、たとえば「但絵図仕指上申候」(3)、「委曲絵図二仕指上申候」(4)と書かれているように、報告書に添付して絵図が提出されていることである。別表の中に欄を設けて示したように、「絵図」提出の記載は全部で一〇カ所ある。そして、その中には、以下に見るように絵図②⑥と対応すると考えられるものがある。まず米沢領の館山周辺を描いた絵図②は、(12)の末尾に「右之所之絵図指上申候」と書かれている。「絵図」に該当すると考えられる。「右之所」とは、具体的には(10)館山(政宗住居の山城)と田沢館屋敷、(11)成嶋の八幡宮と龍寶寺を指しており、これらが絵図②には描かれている。ただし、(12)慈悲寺旧地のことは絵図には見えない。

次に会津領の檜原周辺を描いた絵図③は、(18)末尾の「右之通絵図二仕指上申候」の「絵図」に該当する。(13)政宗館・がうの原・馬場、(14)ぼとう山、(15)磐梯山、(16)阿妻嵩、(18)殿山などが絵図に描かれている。

同じく会津領の大塩の絵図④は、(20)末尾の「右之絵図指上申候」の「絵図」に該当する。(20)に書かれた潮温泉と塩づくりのようすが絵図に描かれ、城山も「古館山」として絵図に描かれている。

同じく会津領の猪苗代周辺を描いた絵図⑤は、(32)末尾の「右絵図指上申候」の「絵図」に該当すると考えられる。(25)金川・三橋、(26)駒形山、(27)大寺・金川橋、(29)金上・佐瀬の墳墓、(30)摺上原・八森・糠塚、(31)小平湯天神・兼載松と梅、(32)三町湯・坪下などが描かれている。

安達郡塩松付近を描いた絵図⑥は、(61)の「右塩松領安達郡之内二御座候、委絵図仕指上申候」の「絵図」に該当すると考えられる。その前から続く記事の(50)弘中渡・輝宗墳墓、(51)小浜・宮森、(52)義継礫の松、(53)築館、(54)小手森、(55)新城、(56)岩角、(58)竹からやしき、(59)長袖、(60)糠沢などが絵図に書き込まれている。

さらに絵図そのものは現在確認されていないものの「竹内二〇〇七」、絵図①に貼られている付箋「會津中将君御廟繪圖別紙二云々」に対応する絵図が、おそらく(34)末尾に「右之絵図指上申候」と書かれたもので、(33)正之廟、(34)磐椅大明神などを描いた絵図なのだろう。

このように、合計すると6件が対応することが確認できる。「延宝五年所々廻見覚書」には、その他にも絵図を提出したと書かれているが、それらについては現在確認されていない。

なお全体の見取り図的な意味を持つと思われる絵図①については、とくに該当する記載は見られなかった。

### 3 落合勘左衛門と窪田権九郎について

「延宝五年所々廻見覚書」を作成した落合勘左衛門と窪田(久保田)権九郎とは何者であるか。すでに先行研究でも触れられているところもあるが、あらためて関連する史料を掲出しながら補足しておきたい。

落合勘左衛門時成は、「青山公治家記録後編」「伊達世臣家譜」「伊達世臣家譜續編」「家世實紀」に登場する。「伊達世臣家譜」では、

百一落合

落合姓源、其先出自落合喜平治政成、不知其先、其裔世為三武州埼玉郡房以三川関所守、今称落合源兵衛某是也。政成長子権兵衛成林為祖、其裔為虎間番士、今保三三百石之禄、成林慶安四年七月義山公時、給二八兩八口、二拳二小姓組、病免、寛文十二年七月為三江戸番組、明暦三年八月賜今之禄、以納前資、先是政成養加世加兵衛清成第三男、配女為嗣、称之落合勘左衛門時成、寛文二年青山公初、来于仙台、三年十二月賜二十五口、八年十二月又賜三十五兩、延宝八年九月賜二百石、以納前資、元禄三年十二月、有罪収其田禄、十一年十二月以三十口、二拳二広間番士、其裔保三父祖之禄、今称落合源太左衛門時安是也、成林子鳥之助成直、元禄四年青山公末、二拳二使者番、後為三江戸番組、成直子権弥成純、正徳四年四月獅山公初、二拳二小

姓組、在江戶日、享保二年四月三日仙台大地震、為貞樹孺人<sup>奉</sup>使仙<sup>台</sup>、忠山<sup>台</sup>、征車兼道四日至、是歲十二月、又會貞樹孺人病、隨公兼道、後屬二世子、公歷<sup>庶務</sup>、<sup>手水番小納戸</sup>、大所判形役<sup>為</sup>近習、又遷二世子小姓頭、成純子忠三郎成任、年甫十五、不幸早世、以弟立三其苗跡、稱之權兵衛成善、明和二年十一月今公初、拳江戶番馬上、成善子直之丞成之、と書かれ、「伊達世臣家譜續編」には

七十八落合

落合姓ハ源、其ノ先ハ出<sup>レ</sup>自<sup>レ</sup>武州粟橋ノ關尹落合喜平治某、以<sup>テ</sup>喜平治カ義子藤九郎<sup>初稱</sup>勸左衛門ト<sup>後</sup>時成ヲ為<sup>レ</sup>祖ト、今其ノ裔為<sup>ニ</sup>広間番士ト保二百二十二石七斗二升ノ之禄ト、時成ハ者勢州桑名ノ之産、加世加兵衛時清カ三男也、初為<sup>ニ</sup>喜平治某<sup>ニ</sup>所<sup>レ</sup>養後請<sup>テ</sup>仕<sup>ニ</sup>當家<sup>ニ</sup>、使<sup>ニ</sup>弟<sup>ヲ</sup>シテ為<sup>ニ</sup>喜平治カ之嗣ト、寛文二年來<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>仙台<sup>ニ</sup>、肯山公給<sup>レ</sup>廩十五口ヲ、拳<sup>ニ</sup>中ノ間ノ番士<sup>ニ</sup>、八年十二月、為<sup>ニ</sup>金十五兩廩十五口ノ之禄ト、後屢々與<sup>ニ</sup>諸務<sup>ニ</sup>至于京師<sup>ニ</sup>、近衛家賜<sup>ニ</sup>益及<sup>ヒ</sup>羽二重縮緬ヲ帰國ノ時、公賜<sup>ニ</sup>黄金三枚ヲ、延宝八年數預<sup>ニ</sup>家系ノ之事、一賞<sup>シ</sup>テ之ヲ賜<sup>ニ</sup>田二百石ヲ、収<sup>ニ</sup>前<sup>キ</sup>ノ廩米俸金ヲ、天和三年 命<sup>ニ</sup>次ノ之間ノ詰ヲ、貞享元年九月 肯山公手自賜<sup>ニ</sup>金十兩ヲ、十一月在<sup>ニ</sup>于<sup>ニ</sup>江戶<sup>ニ</sup>時、奉<sup>シ</sup>テ命ヲ飾髮シ、曰<sup>ク</sup>盛藤庵<sup>謙春</sup>ト、有<sup>レ</sup>慙懃ノ之命、肯山公作<sup>レ</sup>詩ヲ、與<sup>ニ</sup>謙春<sup>ニ</sup>、其ノ詞曰、謙哉天地風不擇花塵無意動千樹嗚呼今古春、以親書<sup>シ</sup>テ賜<sup>レ</sup>之ヲ、後數々有<sup>ニ</sup>賜物<sup>ノ</sup>、不<sup>レ</sup>違<sup>ニ</sup>枚拳<sup>、</sup>時成無<sup>シ</sup>子、養<sup>テ</sup>中村伊右衛門<sup>景</sup>カ三男ヲ、以為<sup>ニ</sup>嗣ト、稱<sup>ニ</sup>之<sup>ヲ</sup>平之丞<sup>初稱</sup>猪<sup>之助</sup>時定ト<sup>初ノ名</sup>ハ時習<sup>（以下略）</sup>とある。

このように、落合勸左衛門は、寛文二年（一六六二）に、伊達綱村が仙台藩主に就任したのち、仙台に入った。延宝三年（一六七五）十二月二十四日には、久保田権九郎とともに「於焼火間落合勸左衛門・久保田権九郎ヲ徴シ、伊達米澤等 御先祖ノ舊跡ヲ尋ニ遣サル」（肯山公治家記録後編「巻一」とあり、まず福島県伊達郡近辺の探索に派遣された。彼らは延宝四年（一六七六）一月二十五日に帰還し、「御先代ノ様子訪問、念入神妙ニ承届皈府、因テ御着服ノ小袖各一領」（肯山公治家記録後編「巻一」）を賜っている。延宝五年（一六七七）二月十一日に、彼らは会津に現れている。これは「家世實紀」のみ記載され、「治家記録」には見られない。少し長いが、現在のところ、彼らが会津に来たことを示す唯一の記述であり、引用する。

二月十一日、松平陸奥守様古キ墓所為尋、落合勸左衛門・窪田権九郎 会津江被遣、

天正十七年伊達正宗蘆名義広と於摺上原合戦勝利之上、会津壱ヶ年程被為領候節、御一族之内死去之方有之由ニ而、其墓所為尋、陸奥守様古勸左衛門・権九郎、当月十日御領内へ可被差越候、彼者共知行取ニも無之輕士之由ニ候、馳走ケ間敷義無之様堅御断之由、陸奥守様衆申來候、依之逗留中馳走ハ不仕、用向無滞様随分致心入聞合候儀、別而埒明候様可申付旨被仰下候ニ付、御領内旧地古跡之寺院へ兼而致其心得、惣而用所等無滞相調候様筋々へ申付候処、兩人七日町問屋彦之丞所へ致着候間、逗留中坂井市左衛門附置料理為差出、寺院之内興徳寺一見為案内、神料役人蓮沼儀右衛門差添、其外融通寺をも勸左衛門儀自分ニ致一見、同廿二日当町発足、塩川組三橋村へ懸り、夫々大寺摺上へ参度由兩人申候故、為案内儀右衛門差添遣候得共、其段遠慮ニ存、加様ニ被成下候而者、直ニ江戶へ可罷帰と申ニ付、任其意儀右衛門不相添、兩人之者共一見相濟罷帰候、

これを見ると、落合・窪田兩名が「松平陸奥守」すなわち伊達綱村によつて「会津壱ヶ年程被為領候節、御一族之内死去之方有之由ニ而、其墓所為尋」するために会津に派遣されたこと、彼らが「知行取ニも無之輕士」であること、「七日町問屋彦之丞所」に滞在し「坂井市左衛門」が二人に料理を世話したこと、「興徳寺」「融通寺」を見に行ったこと、三橋から大寺に二人が行くとき「神料役人蓮沼儀右衛門」を案内につける、と言ったところ、「其段遠慮ニ存、加様ニ被成下候而者、直ニ江戶へ可罷帰と申ニ付」、つまり、それは遠慮し、どうしてもというならまっすぐ江戶まで帰る、というので二人が言うとおりに案内を付けずに、二人は会津内の「一見」を済ませて帰った、ということがわかる。

このうち、興徳寺については「延宝五年所々廻見覚書」（第2章参照）でも「高（興）徳寺ハ放火不被成候由」（24）と記述がある。一方、二人の目的として伝えられた、「御一族之内死去之方有之由ニ而、其墓所為尋」については、「延宝五年所々廻見覚書」には詳しくは書かれていない。

落合勸左衛門は、この調査以後も、延宝六年（一六七八）九月に下野中村八幡宮に伊達時長が奉納したとする軍配団扇を受け取りに行つたり、伊達家の系図調査で京都に派遣されたりしている。そして延宝八年（一六八〇）には「御系図ノ御用勤勞」により禄二十貫文を拝領している。貞享元年（一六八四）には落髮して盛藤庵謙春と号した。しかし元禄三年（一六九〇）に養子の時定が罪を犯したことにより禄を収公されたが、元禄十一年（一六九八）に念西公（伊達朝宗）五百年忌の恩赦で復歸した。『仙台藩資料集成』

の責任編集である平重道氏は「落合勘左衛門のこと」という一項を設け、「網村初期の家史編纂事業に協力した一人として、落合勘左衛門時成は記憶せらるべき人物である」とする「平編一九七六」。

もう一人の窪田（久保田）権九郎は「伊達世臣家譜」「伊達世臣家譜續編」に記載がなく、出自・系譜は未詳である。先述の通り、彼は落合勘左衛門とともに延宝三年に伊達・信夫へ、延宝五年に会津に来ていた。「治家記録」では天和三年（一六八三）十月に「性山公法事ニ依テ罪科赦免ノ輩、（中略）先年配流窪田権九郎ニ俸金給米ヲ賜フ、」とあり、伊達輝宗百年忌により罪科を赦免されていることからこれ以前に配流されているようだが、その記事はない。貞享元年（一六八四）二月晦日には、「窪田権九郎家督孫八郎、初テ御礼不知」として、窪田権九郎の家督を相続した孫八郎が初御礼をしている。「治家記録」の彼に関する記事はこれだけだが、元禄十二年（一六九九）の仙台藩の国絵図の裏書に「窪田権九郎仕立申候御絵図」とあることから「川村一九八三」、絵図作成の技能を持っていた可能性が高い。しかしいずれの資料にも、この二人が伊達氏の先祖を探査する役目について明確な理由を記したものは管見の限り見当たらなかった。

## まとめ

延宝三年十二月に、仙台藩士の落合・窪田の両名が、藩主の綱村より伊達家先祖の旧跡の調査を命じられ、同五年に米沢・会津・仙道、さらには常陸・下野方面を探査した。その結果は同年四月二十一日付けで「延宝五年所々廻見覚書」として報告されたが、この時に一緒に藩に提出された絵図があり、その一部が「会津全図」と称される絵図群に該当すると考えられる。したがって絵図群の成立時期は延宝五年四月であり、その作成目的は、落合・窪田両名による伊達家の先祖調査の報告のためと結論することができる。1で詳しく紹介・検討した絵図群の内容や特色は、この結論と整合的に理解できる。

本稿では、絵図群の基本的な性格を確定することに重点を置いたため、個々の絵図の詳しい分析などは今後の検討課題である。

また、関連する絵図群として宮城県図書館所蔵「伊達分御絵圖」があり、これに対応する「伊達信夫廻見仕候覚書」（1009号 一冊 延宝三年十二月十七日）という報告書もある。「竹内二〇〇七、松浦一九八七、土生一九九四、羽下二〇〇一」。覚書の作成者は落合・窪田の両名で、こちらには、

伊達郡・信夫郡の村町の寺社・墓所、館・古城などの記述があり、末尾に「伊達郡の惣絵図一枚、光明寺・梁川・満勝寺・福島等之絵図、各四枚指上申候」とある。これらも合わせて検討しながら、この時の伊達家の先祖調査の全体像に迫ることも、今後の課題である。

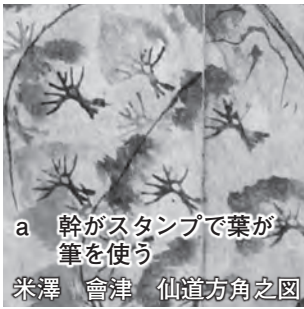
## 〈謝辞〉

絵図掲載については宮城県図書館より許可をいただき、写真利用については仙台市博物館・北塩原村教育委員会の協力を得た。また本稿を成すに当たって、羽下徳彦、佐々木徹、水野沙織、阿部綾子、布尾和史の諸氏に御指導・御助言をいただいた。福島県史学会の報告においても会員諸氏より御助言をいただいた。記して謝意を表する。

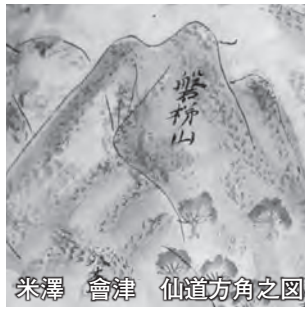
## 〈史料出典〉

- ・「性山公治家記録」平重道編『仙台藩史料大成 伊達治家記録一』一九七二
- ・「眞山公治家記録」平重道編『仙台藩史料大成 伊達治家記録一』一九七二
- ・「肯山公治家記録後編」平重道編『仙台藩史料大成 伊達治家記録七・八・十』一九七六・七七
- ・「伊達世臣家譜」平重道編（復刻版）仙台叢書 伊達世臣家譜 第二巻 一九七五
- ・「伊達世臣家譜續編」平重道編『仙台藩史料大成二 伊達世臣家譜続編 第二巻 一九七八
- ・「片倉代々記」『片倉小十郎景綱関係文書』白石市文化財調査報告書第四七集 白石市教育委員会編 二〇一三
- ・「仙台武鑑」鈴木省三編『仙台叢書別集 第3巻』仙台叢書刊行會一九二六
- ・「封内風土記叙」『仙台市史 資料編2 近世1 藩政』仙台市一九九六
- ・「米沢事跡考」石田勘四郎編『米沢古誌類纂』一九〇八
- ・「伊達天正日記」小林清治校注『伊達史料集下』一九六七
- ・「政宗記」小林清治校注『伊達史料集上』一九六七
- ・「奥羽永慶軍記」近藤瓶城編『史籍集覧第8冊 奥羽永慶軍記』近藤出版部一九〇四
- ・「会津旧事雑考」『会津資料叢書下』会津資料保存会編一九七三
- ・「会津四家合考」黒川眞道編『国史叢書 会津四家合考』国史研究会 一九一五

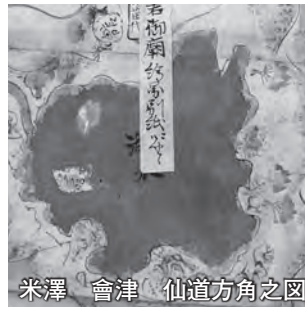
- ・「松原軍物語」菊池研介編『松原軍物語』会津資料保存会 一九一七
- ・「会津藩家世實紀」豊田武編『会津藩家世實紀 第3巻』一九七七
- ・「会津鑑」『会津鑑四』會津史料大系刊行会編 一九八二
- ・「新編会津風土記」花見朔巳編『新編会津風土記 第三巻』雄山閣 一九八四
- 〈引用・参考文献〉(編著者名の五十音順)
- ・川村博忠 一九八三「元禄年間の国絵図改訂と「加文」要請」『地理科学』三八
- ・菅野正道 二〇一六「伊達氏、戦国大名へ」『伊達氏と戦国争乱』吉川弘文館
- ・北塩原村教育委員会 二〇一五『戦国時代の終焉 伊達政宗の会津侵攻』
- ・北塩原村教育委員会 二〇一七『会津戦国時代の終焉 伊達政宗の会津侵攻 講演録』
- ・公益財団法人上廣倫理財団・南奥羽戦国史研究会 二〇一七『伊達政宗の挑戦』配付資料
- ・桑折町教育委員会 二〇一六『史跡桑折西山城跡発掘調査総括報告書』桑折町埋蔵文化財調査報告書二九
- ・齋藤鋭雄 二〇〇三「第二章第一節 綱村・吉村の政治」『仙台市史 通史編4 近世2』
- ・坂田啓編 二〇〇一『私本 仙台藩土事典(増訂版)』
- ・塩川町 二〇一〇『塩川町史 第三巻』
- ・下館町郷土史調査会編 一九四〇『下館町郷土史』下館町役場
- ・仙台市 一九九四『仙台市史 資料編10 伊達政宗文書1』
- ・仙台市 二〇〇〇『仙台市史 通史編2 古代中世』
- ・仙台市博物館 二〇一七『図録 特別展 伊達政宗ー生誕四五〇年記念』高橋明 二〇〇七「第三章 中世」『北塩原村史』
- ・高橋明 二〇一〇「伊達政宗の会津侵攻」『会津若松市史研究』十一
- ・竹内英典 二〇〇七「宮城県図書館所蔵未整理絵図について(2)」『平成一八年度宮城県図書館貴重資料専門調査報告書』
- ・伊達市教育委員会 二〇一七『戦国大名伊達氏の胎動』配付資料
- ・東北歴史博物館 二〇一八『図録 特別展 伊達綱村』
- ・富岡儀八 一九七六「山塩の生産」『地理』二二―五 古今書院
- ・富岡儀八 一九八三『塩の道を探る』岩波書店
- ・羽下徳彦 二〇〇一「奥州伊達氏の系譜に関する一考察」『歴史』九六
- ・土生慶子 一九九四『伊達氏の源流の地』宝文堂
- ・福島県教育委員会 一九八三『歴史の道 二本松街道(会津街道)』
- ・平凡社 一九八七『宮城県の地名』
- ・平凡社 一九九〇『山形県の地名』
- ・平凡社 一九九三『福島県の地名』
- ・平凡社 一九八二『茨城県の地名』
- ・平凡社 一九八八『栃木県の地名』
- ・松浦丹次郎 一九八七『伊達氏誕生』土竜舎
- ・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館 二〇一二『中世やまがたの城館跡』
- ・米沢市上杉博物館 二〇一六『図録 伊達氏と上杉氏』
- ・米沢市教育委員会 二〇一五『館山城跡』米沢市埋蔵文化財調査報告書第一〇七集



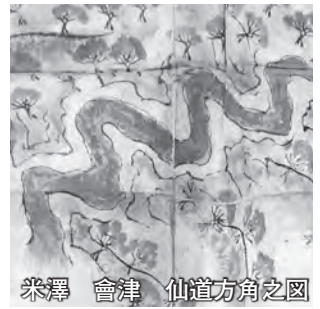
米澤 會津 仙道方角之図



米澤 會津 仙道方角之図



米澤 會津 仙道方角之図



米澤 會津 仙道方角之図



館山 成嶋図

図1 木



図2 磐梯山

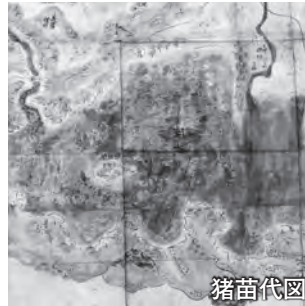
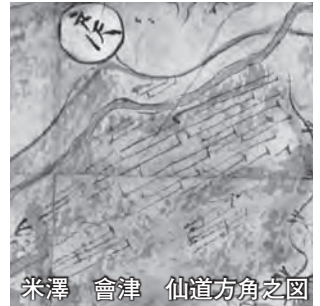
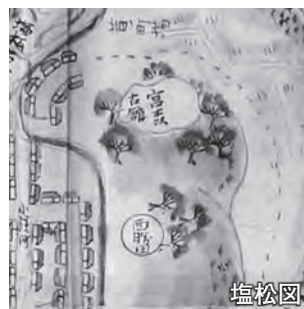


図3 猪苗代湖



米澤 會津 仙道方角之図

図4 川



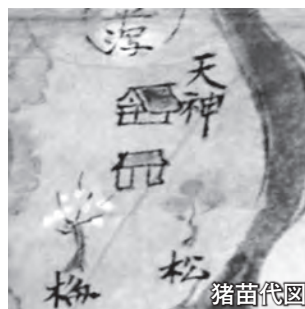
塩松図

図5 道



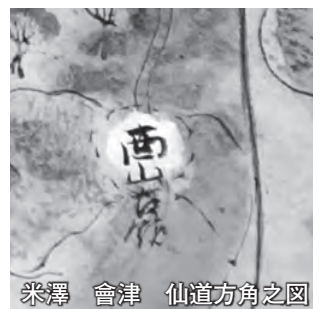
塩松図

図6 家



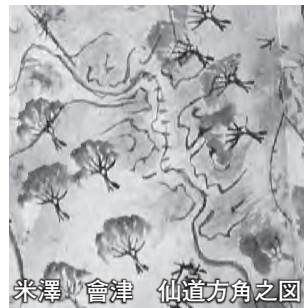
猪苗代図

図7 寺社



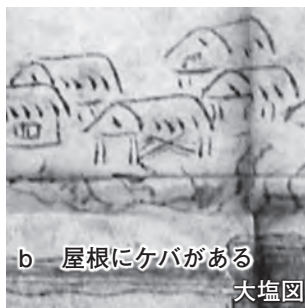
米澤 會津 仙道方角之図

図8 古館



米澤 會津 仙道方角之図

図5 道



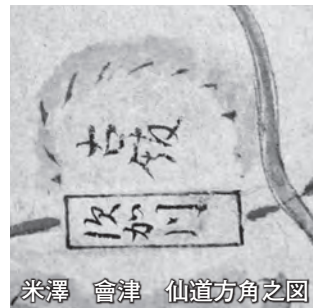
大塩図

図6 家



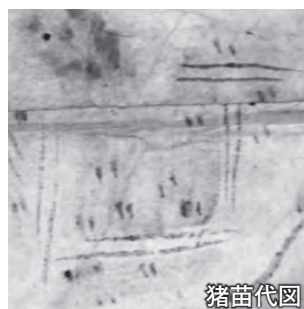
大塩図

図7 寺社



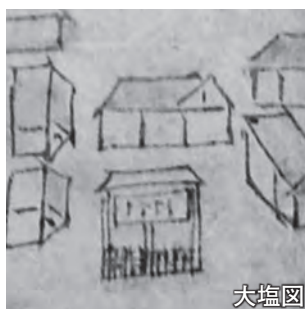
米澤 會津 仙道方角之図

図8 古館



猪苗代図

図9 耕作地



大塩図

図10 高札場



大塩図

図11 柵と栴

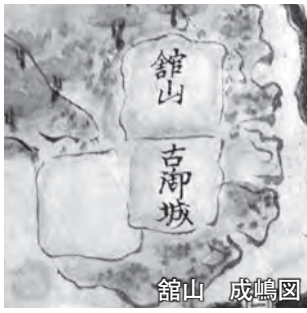


館山 成嶋図

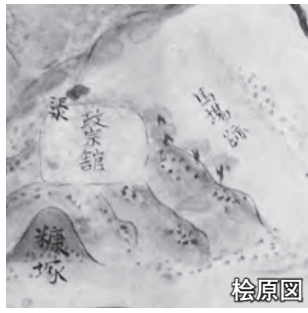
図12 橋

第1図 「会津全図」個別図1 (絵図はすべて宮城県図書館蔵)





館山 成嶋図



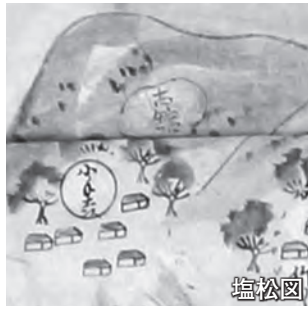
萩原図



米澤 會津 仙道方角之図



塩松図



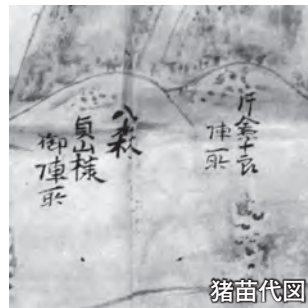
塩松図



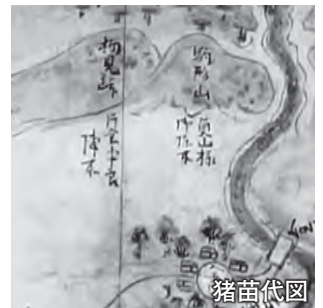
塩松図



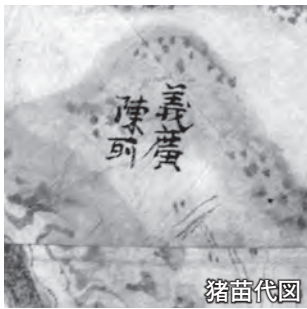
米澤 會津 仙道方角之図



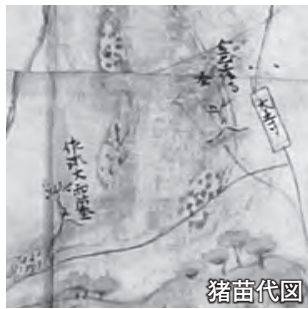
猪苗代図



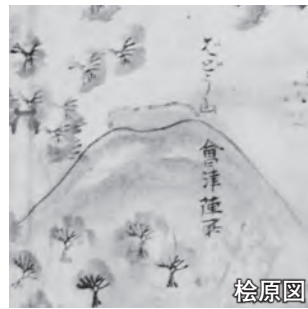
猪苗代図



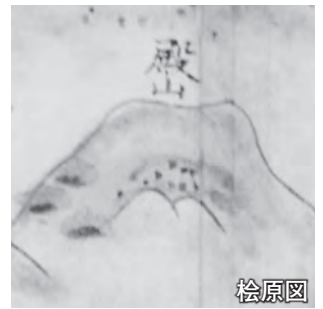
猪苗代図



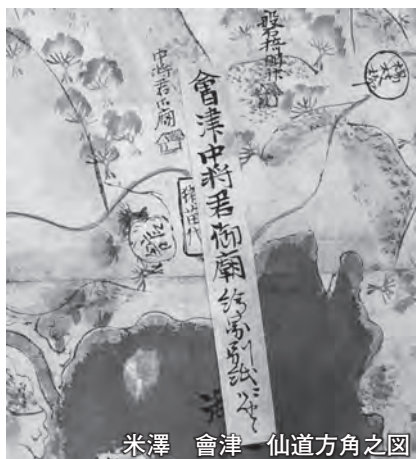
猪苗代図



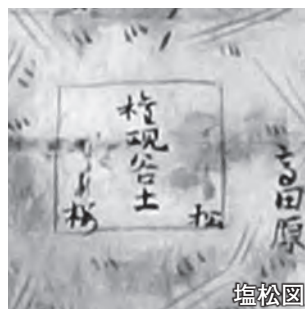
萩原図



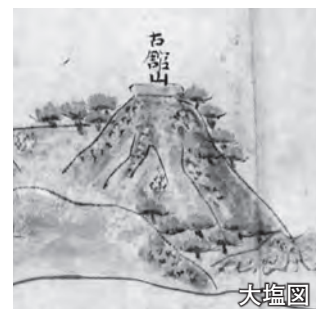
萩原図



米澤 會津 仙道方角之図



塩松図



大塩図

絵図に見られる遺跡、名所

第2図 「会津全図」個別図2 (画像はいずれも宮城県図書館蔵)

別表 「延宝五年所々廻見覚書」の概要と「絵図」記載

番号	地域名	記述されているポイント	「絵図」記載
1-3	荻田郡湯原町（宮城県七ヶ宿町）仙台藩領最南西端	○鹿音山東光寺（9代政宗位牌）・旧地（東光寺山・同屋敷・同隠居屋敷） ○屋代山（政宗陣所）	3：但絵図仕指上申候
4-5	夏苺村（山形県高島町）米沢藩領（以下同じ）	○慈雲山資福寺旧地・輝宗墓・石塔・遠藤基信石塔 ○長井殿館	4：委曲絵図ニ仕指上申候
6	栖島村（山形県川西町）	○湯目半内住居・八幡宮	
7-12	置賜郡米沢（山形県米沢市）	○米沢城（直江山城築城） ○観音像・観音寺（本町）・輪王寺昌伝庵旧地 ○館山（政宗住居） ○田沢館（新田氏） ○成島八幡宮・龍宝寺 ○慈悲寺旧地（遠山）	12：右之所之絵図指上申候→絵図②
13-18	耶麻郡檜原町（北塩原村）会津藩領（以下同じ）	○政宗館（御館山・がうの原・馬場） ○ぼどう山 ○磐梯山 ○阿妻嵩 ○御館山門扉 ○殿山	18：右之通絵図ニ仕指上申候→絵図③
19	檜原峠	○檜原峠	
20	大塩（北塩原村）	○潮温泉 ○城山（三瓶大蔵）	20：右之絵図指上申候→絵図④
21	関村	○猿倉峠 ○関柴 ○漆	
22-24	会津郡若松（会津若松市）	○向羽黒山（葦名盛氏隠居所）○瑞雲山興徳寺	
25-26	金川 三橋（喜多方市）	○館屋敷跡・金川橋 ○駒形山・物見山	
27-29	大寺（磐梯町）	○日橋 ○金上盛備古墳 ○佐瀬大和古墳	
30	摺上原（磐梯町）	○八森山（政宗陣）・糖塚（片倉小十郎陣） ○古塚	
31-32	小平潟（猪苗代町）	○天神社・兼栽松・兼栽梅 ○三町（城）潟	32：右絵図指上申候→絵図⑤
33-34	磐梯山西麓（猪苗代町）	○中将正之君御廟堂 ○磐椅大明神	34：右之絵図指上申候→絵図①に付箋のみ
35	猪苗代町	○猪苗代盛国居城 ○猪苗代盛胤墓（宇津野村）	
36-43	安積郡中山 横川 苗代田（郡山市）二本松藩領（以下同じ）	○中山大蔵居所 ○横川古城 ○高玉古城 ○阿子島古城 ○苗代田古城 ○前田沢 ○荒井村 ○青田原（太田原）	
44-48	本宮・人取橋（本宮市）	○人取橋 ○観音堂旧地 ○古館 ○富宝山石雲寺 ○玉ノ井城跡	
49	二本松（二本松市）	○二本松古城・栗柵	
50-61	安達郡塩松（二本松市）	○弘中渡 ○輝宗御墳墓（高田原） ○小浜・宮森 ○築館古城跡 ○小手森城跡 ○新城城跡 ○岩角古城跡 ○樵山（不明） ○竹屋 ○長岫（長崎） ○糠沢	61：委絵図仕指上申候→絵図⑥

宮城県図書館蔵「会津全図」について

番号	地域名	記述されているポイント	「絵図」記載
62-65	安積郡（郡山市）	○高倉古城跡 ○中村 ○片平 ○郡山古城跡	
66	須賀川（須賀川市）	○須賀川城跡・城山	66：右何も絵図ニ仕指上申候
67-77	常陸国真壁郡伊佐庄中館 （茨城県筑西市） 下館藩領	○行朝館 ○内御前 ○諏訪・八幡社 ○観音堂・別当施無畏山観音寺・塚 ○八町 ○勤行川 ○泉（頼朝・伊達石塔） ○下館城	77：右之通委絵図ニ仕指上
78	下野國中村（栃木県真岡市）	○遍照寺・釈迦堂 ○八幡宮（頼朝石塔）	

※『宮城県の地名』『山形県の地名』『福島県の地名』『茨城県の地名』『栃木県の地名』を参考に作成



口絵1 米澤 會津 仙道方角之圖 (宮城県図書館蔵)



口絵2 米澤領 館山 成嶋圖 (宮城県図書館蔵)



口絵3 若松領耶摩郡榎原村圖（宮城県図書館蔵）



口絵4 若松領耶摩郡大塩村圖（宮城県図書館蔵）



口絵5 若松領 猪苗代・金川村・三橋村・日橋・摺上原・磐梯山圖 (宮城県図書館蔵)





口絵 6 安達郡塩松圖 (宮城県図書館蔵)